

## 〈日本近世近代史部会〉

### 一九三〇年代の盛岡における多目的催事の変遷

―公会堂から百貨店へ―

東北大学史料館 加藤 諭

本報告は、一九三〇年代における地方都市の催物状況について、公会堂や百貨店が相次いで成立することになった盛岡を対象地域とし、その変遷を明らかにすることを目的とする。一九三〇年代の盛岡には、川徳、松屋の二百貨店が成立することになるが、呉服店や専門店時代以来の展示・陳列会形式、特売会形式の催物に加え、百貨店化に伴い、展覧会形式の催物が店内で開催されるようになっていく。この結果、百貨店成立以前から設置されていた岩手県公会堂は催事機能の役割を変化させていった。

一九三〇年代前半、岩手県公会堂はあらゆる催物が開催される多目的催事空間であったが、一九三〇年代半ば以降、展覧会形式の催物は主として川徳や松屋で開催され、公会堂は演奏や発表会、映画鑑賞などを軸に開催していくようになる。また、こうした機能分化を前提として、市内あげての大規模な催物が展開される際には、統一したテーマのもとで、百貨店、公会堂、野外公園などがそれぞれの会場の強みを生かした催事を連動して行うようになる。こうした大規模催事の主催・後援には、地方行政機関、そして地元の地方新聞社が深く関わっており、啓蒙活動や思想普及活動に関する文化催事を地方都市にもたらした。この結果、百貨店は消費空間である一方で、ある種公共的な場としての側面も帯びることになっていく。